

Title	三島由紀夫の文学
Author(s)	佐藤, 秀明
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58535
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	佐藤 秀明
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 24111 号
学位授与年月日	平成22年5月13日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	三島由紀夫の文学
論文審査委員	(主査) 教授 出原 隆俊 (副査) 教授 清水 康次 准教授 加藤 洋介

論文内容の要旨

本論文は、三島由紀夫の主要作品について考察し、その読解を示したⅠ章と、その上で三島文学全体の主題を析出したⅡ章、研究状況への提言や創作ノートの解説などのⅢ章からなる。四六判539ページである。

Ⅰ章の各論では、主要な作品について、地勢の分析、絵画や写真の分析、身体論、ジェンダー論、ゲイスタディーズ、語りの理論、読者論、日本思想史、政治史などが援用され、丁寧な分析の上に立って、従来の論にない問題を明らかにしつつ、作者の意図の追求とはまた別のテキストの可能性を検証する論者の意図が加えられている。論者の姿勢として、「作者の死」には全く拘泥しないが、文学テキストの読解の可能性を描き、点検し、構築するという文学研究の実践がなされている。

こうした試みを通して、『仮面の告白』のセクシュアリティや『金閣寺』の美、『薔薇と海賊』の童話、『鏡子の家』のニヒリズム、『憂国』の切腹、『豊饒の海』の優雅や忠義などは、「現実が許容しない詩」であり、「現実が許容しない詩」こそがリアルな生であるという主張を浮かび上がらせている。

この点についてはⅡ章「〈現実が許容しない詩〉と三島由紀夫の小説」が総体を論じている。Ⅰ章の各論を通して浮上する問題は、虚構を生きることと現実との相克であり、三島由紀夫の作品にはこの問題が主題として通底しているとする。「虚構を生きる」とは、存在論的な実感に基づく志向性ともいったことであるが、そのような生は、しばしば不条理なものが立ち現れ、現実との間に齟齬が生じる。そのためその生は、現実の側からは「虚構を生きる」としてしか見られないことを指摘する。とはいえ、各論は作者の主題を析出することだけに力点を置いたものではない。作品のもつ可能性を、読解の可能性として最大限に引き出そうとしている。

Ⅲ章のうち、「作者」についての提起―「仮面の告白」を例として―では、学会の動

向を踏まえつつ、テキスト論と緊張関係にある自己の作品論の必然性を論じたものである。

『金閣寺』創作ノート解説』は、実際の作業を踏まえた提言を行っている。

全体としては、テキスト読解が現代の読者のいかなる問題意識に接続するかについても論及し、現代読者を取り巻くパラダイムを反省的に捉え返す有効性をも検証するための様々な試みを行った。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ともすれば作品の正面からの読解が忌避されがちな学界の動向の中で、小説のトータルな読みを提示すべく果敢に挑戦したものである。『仮面の告白』や『金閣寺』・『豊饒の海』についてそれぞれ三本の論文が置かれていることも、そうしたことへの強い意欲の反映と言える。対象に応じて様々な角度・方法からのアプローチがなされていることもスリングである。書かれた作品を読むという行為について、方法的な問いかけを持ち続けていると言えよう。同時に、自らの論について、方法や立場を冷静に客観視する眼を堅持しており、信頼するにたるものである。本論文は、三島由紀夫論というよりは、三島作品を素材にして文学テキストの読解の実践報告という性格をもつものであり、学界や一般の文学読者への提言として、読解の具体例を示すことで、リテラシーを養成する側面もある。このことも十分に評価できる。

非現実的な性格が強い物語であると評される『岬にての物語』について、むしろ自伝的体験的要素の強い作品であることを発見したり、『仮面の告白』執筆中に発表された三島の「川端康成論の一方法」を援用して、『仮面の告白』における三島の創作方法を明らかにしようとするところなども、手法として鮮やかである。『憂国』の語りについて、鷗外の作品に言及しつつ、三人称の語り一般の問題へと広げていく展開についても極めて興味深いものがある。『豊饒の海』論では、テキストの空白を前景化しそれを充填することで、物語構造の複雑さを提示して、読解の可能性を大きく開くことに成功している。

さらに各論の成果の上に立って、三島の主題として「現実が許容しない詩」という問題を提起したことも重要な達成と言える。

しかし、このことは、同時に、やや強引な統括に陥っているというのではないかと懸念を抱かせもする。また、「現実が許容しない詩」という問題を引き出す契機となった『詩を書く少年』についての独立した論文がないのも残念である。その解釈によっては、三島作品のトータルな理解に揺らぎが生じる可能性がないとは言いきれない。三人称の語りの問題その他についても、別の解釈の可能性にも触れるべきであろう。

また、いくつかの論において、論理のしめくりにおいて、なお不十分と思われる点が認められる。

このように、さらに要望したい点もなしとしないが、この論文は全体として極めて誠実に取り組まれ、また、さまざまな面で意欲的で、提出した問題は多岐にもわたっており、その達成は高く評価することができる。よって、本論文を博士(文学)の学位にふさわしい

ものと認定する。